

すると、黙ったまま静雄がくしゃくしゃと帝人の頭を撫で回してきた。

「うわっ、何ですかっ」

予想外の行動に慌てたが、尚も静雄は帝人の頭を撫で続けている。犬か猫と勘違いしているのだろうか。撫でる仕草はそれなりに優しいが、何しろいつまでもやめてもらえない。

「いや、何かよ、お前って撫でなくなる頭してるよな」

「どんなですか!」

抗議したが、静雄は笑ってそれでも撫でるのをやめてくれなかった。

ふわりと漂う香りに、静雄が香水をつけているらしい事実を知る。心の片隅で、臨也さんのとは全然違う香りだな、と思ったのは内緒だ。

やがてようやく撫でるのをやめてくれた後に、臨也と今すぐ別れなくても撫でまくった詫びに、と今度キーキセツトを奢ってくれると彼が言い出す。

「え、良いんですか?」

「ああ」

平和島静雄とお茶をする、なんてちよつと希少な体験なので、思わず喜んで了承し、約束をした。

「楽しみにしてます」

「そうか」

はにかんで笑う静雄を見て、この人も美形なんだな、とそのときになって初めて気づく。

何度か話したのに、今まで気づきもしなかった。普段はサングラスで目元が隠れているせいもあるが、単純に帝人が静雄の顔の造形についてはそこまで関心がなかった、ということだろう。あれほど臨也の顔については感心していたことを思うと、やはり恋人ごっこを始める前から彼に恋していたのかもしれない。少なくとも、意識はしていたのだろう。きっと。

休憩時間だったらしく、トムが姿を見せて静雄に声をかける。そこでトムも帝人の姿に気づいた様子で、互いに軽く挨拶をしてからその場を離れた。

そうしてマイペースに歩いていると、携帯が震える。メールだ、と気づいて見てみれば、臨也からだった。

今夜は帝人のアパートへと臨也がやってくる予定だったが、予定を変更して帝人が臨也のマンションに来るようにと謝罪と共に簡素に書かれている。

(仕事が忙しいのかな)

臨也の都合で多少の予定変更は珍しくもない。特に不都合もなく、……というか夜を考えれば好都合ですらあるのて了解の旨を返信し、そのまま駅へと向かうことにした。

マンションへ行く時間の指定はなかったし、臨也が仕事で多忙だと言うのなら、簡単な手伝いくらいは自分にもできるかもしれない。できないにしても、彼の仕事中は食事を作っても良いし、邪魔だと言うなら新宿近辺の漫画喫茶にでも行けば良いだろう。今なら、その程度の金銭的余裕はあった。